

瀬戸前1号横穴墓
瓜生野村古墳30号(横穴墓)

2003

宮崎県埋蔵文化財センター

序

本書は、主要地方道宮崎西環状線道路改築工事に伴い宮崎県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、宮崎市大字上北方所在の瀬戸前1号横穴墓、および県指定史跡「瓜生野村古墳30号（横穴墓）」の調査報告です。

調査の結果、両横穴墓ともに玄室が残存していることがわかりました。玄室の壁面には工具の痕跡が明瞭に残っており、築造当時の技術の一端を垣間見ることができます。また副葬された刀・鎌・斧などの鉄器や須恵器・土師器といった土器類、耳環などの装飾品が、ほぼ原位置と見られるところで確認されています。

それらの成果は、当地域における古墳時代終末期の埋葬などのあり方を知る上で貴重な資料となることでしょう。

本書が、学術資料のみならず学校教育や生涯学習の場で広く活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解を深めるための一助となることを期待します。

なお、調査にあたって御協力いただいた地元の方々、関係諸機関に厚くお礼申し上げます。

平成15年2月28日

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 米 良 弘 康

例　　言

- 1 本書は、主要地方道宮崎西環状線道路改築事業に伴い、平成12・13年度に宮崎県教育委員会が実施した瀬戸前1号横穴墓・瓜生野村古墳30号（横穴墓）の発掘調査報告書である。
調査は、宮崎県土木部宮崎土木事務所の依頼により宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
- 2 本書で使用した位置図は、国土地理院発行の2万5千分の1図を基に作成した。
- 3 遺構の実測は、瀬戸前1号横穴墓では主として吉本正典、永友良典が担当し、橋本英俊、菅付和樹、和田理啓ほかが補助した。また、瓜生野村30号墳の玄室内実測は、業者委託したものを受けた福田泰典が補正した。写真撮影は吉本、福田が行った。
- 4 遺物の実測については、整理作業員の補助を得て、吉本、福田ほかが補正した。また、写真撮影は吉本が行った。遺構の製図は福田が、遺物の製図は吉本が行った。
- 5 空中写真撮影は、(株)スカイサーベイ九州に委託した。
- 6 本書で使用した方位は、座標北および磁北であり、座標北についてはG.N.と明記した。
また、レベルについては、海拔絶対高を用いた。
- 7 土器の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』に準拠した。
- 8 出土した金属製品は、株式会社　京都科学に委託して、応急処置（クリーニング・脱塩・樹脂含浸等）を施した。
- 9 本書の執筆は、各担当者がこれを行った。執筆者は目次に明記している。また編集は吉本が担当した。
- 10 調査の記録類および出土遺物は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

目 次

第Ⅰ章 はじめに

第1節 発掘調査に至る経緯 (著付)	1
第2節 調査の組織 (タ)	2
第3節 遺跡の地理的・歴史的環境 (福田)	2

第Ⅱ章 濑戸前1号横穴墓の調査

第1節 調査の概要 (著付)	6
第2節 遺構 (タ)	8
第3節 出土遺物 (吉本)	10
第4節 小結 (タ)	10

第Ⅲ章 瓜生野村古墳30号(横穴墓)の調査

第1節 調査の経過 (福田)	14
第2節 遺構 (タ)	14
第3節 出土遺物 (吉本)	18
第4節 小結 (福田・吉本)	19

第Ⅳ章 まとめ

(吉本)	22
------	----

挿図目次

第1図 濑戸前1号横穴墓・瓜生野村古墳30号（横穴墓）と周辺遺跡の位置	3
第2図 遺跡周辺の地形	5
第3図 濑戸前1号横穴墓	7
第4図 濑戸前1号横穴墓 床・天井部の構造及び前底部埋土土層	9
第5図 濑戸前1号横穴墓出土遺物及び出土位置	11
第6図 濑戸前1号横穴墓出土遺物(2)	12
第7図 瓜生野村古墳30号（横穴墓）	15
第8図 瓜生野村古墳30号（横穴墓）玄室内流入土土層	17
第9図 瓜生野村古墳30号（横穴墓）出土遺物(1)	19
第10図 瓜生野村古墳30号（横穴墓）出土遺物(2)	20

第Ⅰ章 はじめに

第1節 発掘調査に至る経緯

瀬戸前1号横穴墓と瓜生野村古墳30号（横穴墓）は、宮崎市大字上北方字瀬戸前に所在する古墳時代の横穴墓である。昭和19年12月、当時の瓜生野村の前方後円墳1基、円墳6基、横穴墓40基が「瓜生野村古墳」として一括して県指定史跡になったが、そのうちの上北方地区字瀬戸前に所在する横穴墓群に位置している。昭和56年に実施された県・宮崎市教育委員会による史跡総点検では、この瀬戸前には6基の横穴墓が開口していることが確認されている。

このうち瀬戸前1号横穴墓は、瀬戸前777-2に位置し、平成11年12月、主要地方道宮崎西環状線道路改築事業に伴う歩道部分の掘削工事中に、玄室奥壁側天井部が陥没して発見された。周辺には県指定の横穴墓群が散在していたが、県道の路線はその間を繋って計画されており、現状では周知の横穴墓が存在していない丘陵地であった。発見当時は、完全に前部が埋没し未開口であった。

この宮崎西環状線の路線協議は、平成3年2月に始まり、8月には計画ルートがほぼ決まった。しかし、翌4年7月にルート上に県指定史跡が存在することがわかり計画を変更、平成5年3月に都市計画決定がなされた。掘削工事は、平成11年8月から開始している。その間、県文化課等で路線工区内の南西端にある丘陵地の踏査及び試掘調査を実施し、古墳等が存在しないことを確認している。

ところが、平成11年12月10日、前述のとおり北東側丘陵地帯で歩道部分造成のために丘陵を削平していたところ、未周知の横穴墓玄室天井部分が陥没して穴が開いた。そこで、県宮崎土木事務所と文化課とで協議した結果、路線変更や現状での保存は不可能と判断され、やむを得ず記録保存の措置がとられることとなった。発掘調査は、埋蔵文化財センターにより翌12年1月から実施されることになっていたが、土木事務所と地元との間で調整がつかず、調査も延期することになった。

年度が改まり平成12年6月、崩落した岩片等の下に埋もれている遺物などの調査が、保存上急を要することから地元の同意を受け、7月の梅雨明けと同時に調査に着手することになった。瀬戸前1号横穴墓の調査は、平成12年7月24日から9月6日まで実施し、調査後の安全対策として9月20日に玄室等にクラッシャーラン（碎石）を充填して全て終了した。

一方、瓜生野村古墳30号（横穴墓）は、前述の瀬戸前に所在する横穴墓のうち、県指定地番766イに位置する28~31号のうちの1基であり、現在の地番は776-15と考えられる。この30号墳は、当初、工事による直接的な影響は及ばないとされていた。しかし、30号の玄室の背面にあたる歩道部分の法面工事を実施する際、玄室壁面が岩盤掘削による振動で崩落する可能性があることが判り、平成13年4月、宮崎土木事務所と文化課とで協議の結果、事前に玄室内の記録をとることとなった。調査は、現状変更の手続きを経て、平成13年4月17日から途中写真測量や玄室の崩落防止・保護措置を実施しながら同年12月17日をもって終了した。

第2節 調査の組織

発掘調査を実施した平成12・13年度と遺物整理を実施した平成14年度の組織体制は次のとおりである。

宮崎県埋蔵文化財センター

所長	矢野 剛 (12・13年度)、米良 弘康 (14年度)
副所長兼総務課長	菊地 茂仁 (12・13年度)、大薗 和博 (14年度)
副所長兼調査第二課長	岩永 哲夫
総務係長	亀井 維子 (12・13年度)、野邊 文博 (14年度)
平成12年度 (調査担当)	
調査第一課調査第一係主査	新町 芳伸
調査第二係主査	栗山 正明
調査第二課調査第三係長	菅付 和樹
調査第二課調査第四係長	永友 良典
平成13年度 (調査担当)	
調査第二課調査第三係主査	福田 泰典
調査第四係調査員	工藤 基志
平成14年度 (整理担当)	
調査第二課調査第三係主査	南正覚雅士
	調査第四係主査 柳田 宏一

第3節 遺跡の地理的・歴史的環境

宮崎市の中心を流れる大淀川とその南に位置する清武川。この2本の河川および支流は、南部の南那珂山地と北西部の日向山地に囲まれた大小の丘陵を開析する。同時にこの流れは低地の氾濫原に多量の土砂を運び、広大な冲積平野が展開する。瀬戸前横穴1号・瓜生野村古墳30号（横穴墓）が位置する大淀川以北の池内地区周辺は、この広大な冲積平野を見下ろす低丘陵地帯に当たり、その稜線部分には平坦面が発達するとともに、丘陵裾部には迫状の地形も発達し入り組んだ地形を見せる。遺構はこのような地形の標高30m前後の丘陵斜面を利用して造営されている。

瀬戸前1号横穴墓・瓜生野村古墳30号（横穴墓）が位置する丘陵を中心とした周辺の遺跡としては、繩文海進の段階で形成された柏田貝塚や跡江貝塚、中世の宮崎城跡などがあげられるが、中でも古墳時代の高塚古墳・地下式横穴墓・横穴墓がその数で他を圧倒する（第1図）。

とりわけ平野部の代表となる古墳群である生目古墳群には、4世紀中頃の造営とされ同群中最大規模を誇る3号墳（全長143m）があり、同時期の当該地における権力構造を象徴するものとなっている。加えて5世紀代中頃に出現した地下式横穴墓も、首長クラスの墓としてこれらの高塚古墳と混在して群を形成するようになる。大淀川を挟み生目古墳群と対峙する下北方古墳群の中にある、5世紀後半の畿内地方の古墳と近い組成をもつ豊富な副葬品が確認された5号地下式横穴墓などがその例である。しかし、ほぼ同時期に周防灘周辺の北部九州で展開し始めた横穴墓の宮崎平野部での盛行は6世紀後半と考えられ、先行した地下式横穴墓に比べ若干後出することになる。



第1図 濑戸前1号横穴墓 瓜生野村30号（横穴墓）と周辺遺跡の位置



大淀川下流域には、大小さまざまな規模の14の横穴墓群が確認されている。そのうち代表的なものとしては、蓮ヶ池横穴墓群、池内横穴墓群、上北方横穴墓群などがあげられる。いずれも大淀川左岸に位置している。それぞれの横穴墓群の概要は次のとおりである。

蓮ヶ池横穴墓群は、官崎平野の北に広がる丘陵南東端（標高20～40m）付近に造営された約200基の横穴墓により構成される（昭和46年7月17日国指定史跡）。横穴墓のプランとしては逆台形・切妻形プラン、方形・切妻形プラン、縦長長方形・家形プランなど多様な形態が見られる。

池内横穴墓群は、宅地造成のために昭和49年に緊急調査が実施されている。調査された30基の横穴墓のうちの4基が現状保存（県指定史跡）、残りについては記録保存の形をとり旧状は残っていない。当地はその後の宅地建設により大きく地形の変更を受け、立地環境を推察する手掛かりは残されていないが、調査報告によれば、埋め立てにより消滅した鳥越ノ池を取り巻くように横穴墓が展開していた様子がうかがえる。また、後年に11号横穴墓から発見された銅鏡は脚台と承盤を欠いているものの、宮崎県内で確認された初例であるとともに全国的にもその報告例が少ない遺物である。

上北方横穴墓群は、大淀川左岸に広がる垂水台地を中心とする洪積台地から南に伸びる丘陵斜面に分布している。昭和19年12月15日に同横穴墓群一帯は「瓜生野村古墳」として県指定史跡となっている。今回報告する瀬戸前1号横穴墓と瓜生野村古墳30号（横穴墓）もこの横穴墓群に包括される。現在のところ約60基余りが確認されているが、未確認の横穴墓も含めると総数で100基近くなるものと思われる。なお、該期の集落としては、大淀川左岸の微高地上に立地する淨土江遺跡や、右岸の多宝寺遺跡、竹ノ下遺跡などが知られている。竪穴住居の中央部に構築された土器埋設炉や竈が確認されている。

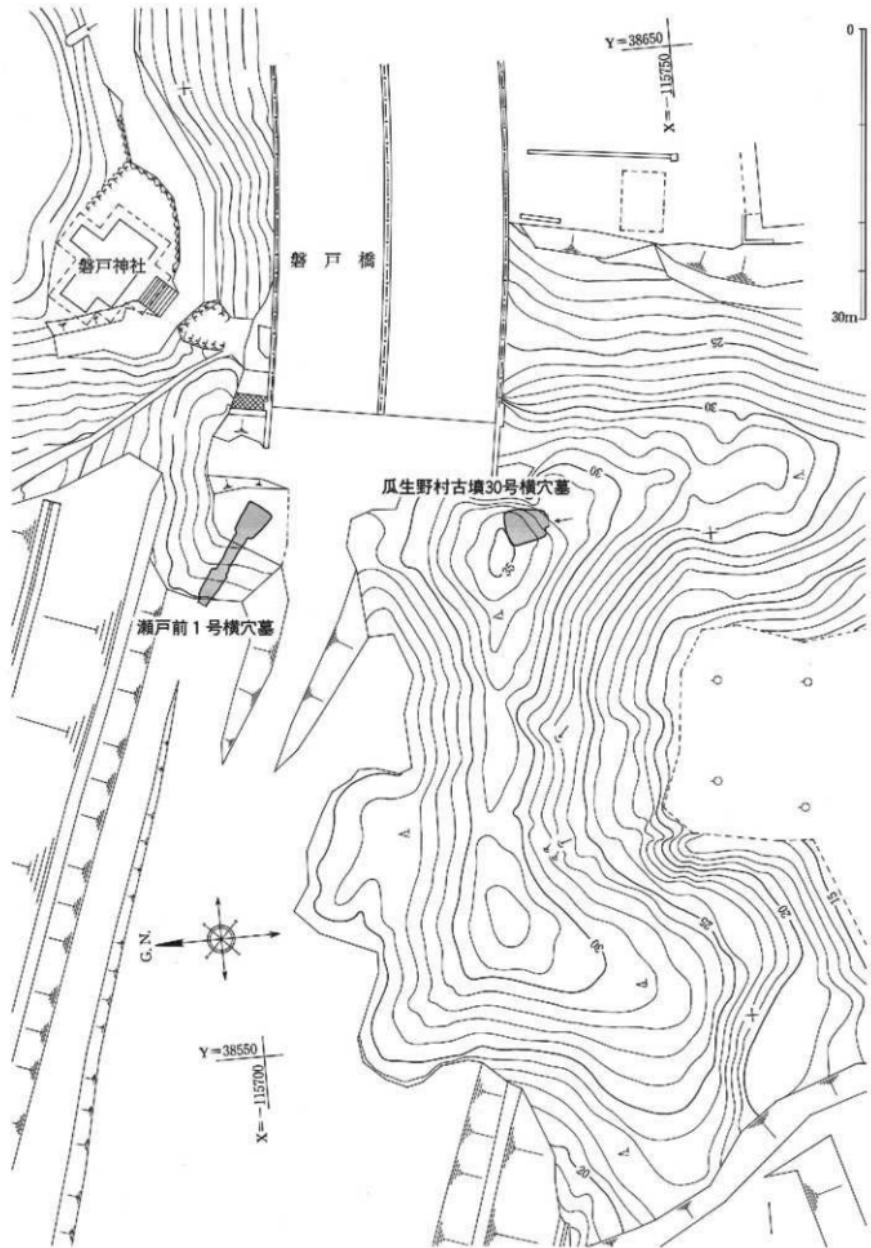
【参考文献】

宮崎県 1993『宮崎県史』「通史編2 原始・古代2」

宮崎県 1993『宮崎県史』「資料編2 考古2」

宮崎県教育委員会・池内横穴墓群調査整理委員会 1997『池内横穴墓群発掘調査整理報告書』

曾我部長良 1975『日向の横穴』



第2図 瀬戸前1号横穴墓・瓜生野村古墳30号横穴墓周辺の地形

第Ⅱ章 瀬戸前1号横穴墓の調査

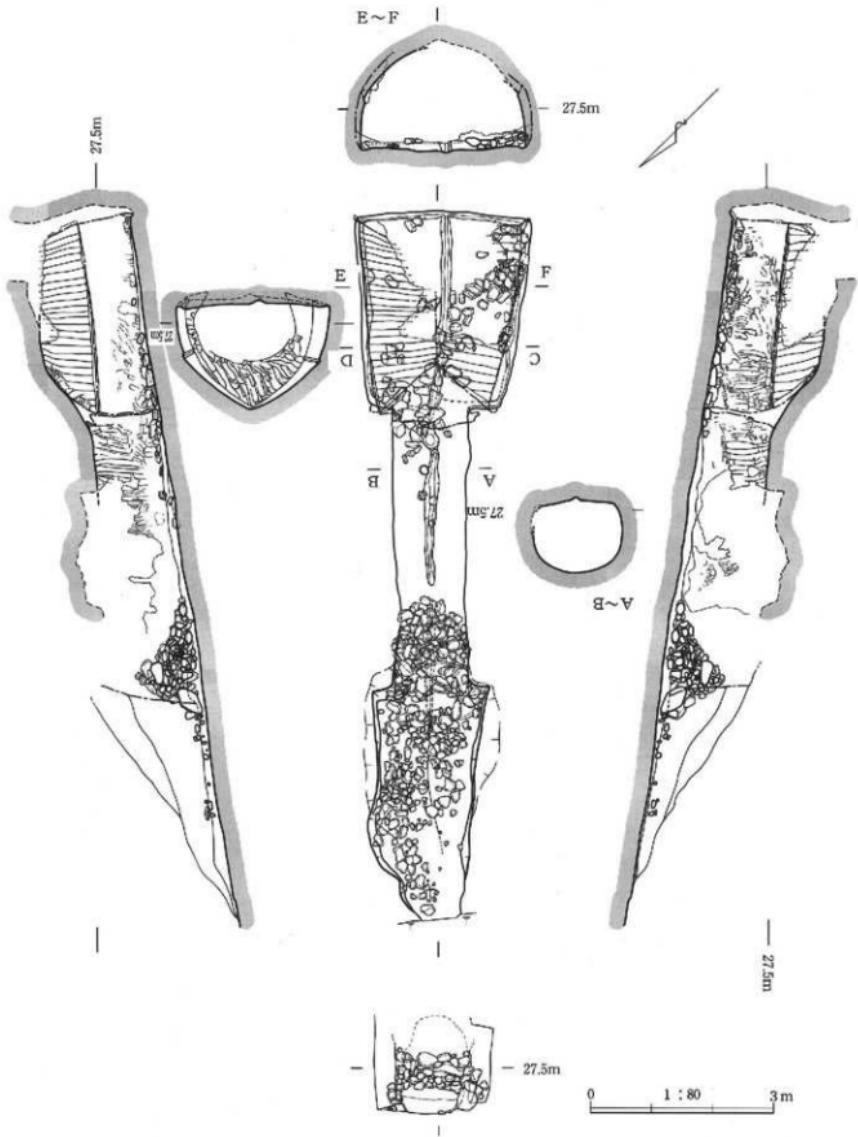
第1節 調査の概要

瀬戸前1号横穴墓は、バックホーによる掘削中に玄室奥壁側天井部が崩壊して発見された。瓜生野村古墳30号（横穴墓）と異なり、県指定古墳にもまた既知の横穴墓にも該当するものが認められなかつたため、字名をとつて「瀬戸前1号」とした。現地は、東西に延びる新設橋梁（磐戸橋）の西側にあたり、歩道部分造成のため北へ延びる丘陵の尾根部分を削平していく陥没したものである。調査前は前庭部が完全に埋没しており、この陥没孔ができるまでは横穴墓の存在が確認できない状況であった。

調査は、まず玄室内から羨門部方向を確認し、羨門部があると考えられる丘陵斜面の雑草や雜木、表土の除去を行うことから始めた。そして、前庭部の輪郭がほんやりと現れた段階で埋土の堆積状況を調べるためにセクションベルトを設定して埋土を掘り下げていった。また、これと併行して玄室内に崩落した多量の土砂の除去も行った。遺構は宮崎層群の分厚いシルト岩層に掘り込んでおり、崩落した岩盤も軟質のシルト岩であった。そこで玄室内部で小さく碎き、陥没孔から降ろした梯子を用いて外部へ運び出した。玄室の崩落土除去後、羨道にも土砂がかなり堆積していたので、はじめは玄室経由で、のちに羨門部が開口すると前庭部側からも土砂を運び出した。この羨道部の堆積土は、羨門からの流入土と羨門側の壁面や天井部が剥落したものと考えられた。土砂の除去は重労働のうえ、天井部崩落の危険性もあったので、作業は殆ど数名の調査員が行った。

最初に陥没孔から玄室に入った際に、崩落の破壊から免れた遺物が奥壁に向かって右側壁の下にあるのが確認されていたが、崩落土を除去すると玄室床面には拳大から人頭大の川原石が散乱しており、その間からも遺物が数点発見された。また、玄室から羨道にかけて傾斜した床面には排水溝が掘り込まれていることが確認された。一方、埋没していた羨門部から前庭部にかけては、土砂の下から大小の川原石を利用した閉塞石が検出され、その閉塞上部の石と考えられる川原石が前庭部に多数散乱する中に、土師器や須恵器の小片も散見された。また、羨門から羨道上部は大きく崩壊しており、土砂を取り除く際に入り口は完全に埋没していたにもかかわらず、羨門部近くの奥壁に向かって右側の土砂の上に車手が置いてあり、また左側の土砂中からは5cm大の小ロウソクが1本出土したことから、この付近は比較的最近まで開口していたと考えられる。なお、墓道の先端付近はカットされたように切っていたが、丘陵の斜面部分であったのか、最近の掘削によるものか、あるいは層の断層部分であったのか判然としなかつた。この墓道に至る丘陵斜面部分の通路等も不明である。

調査終了後、玄室上部は歩道造成のため削平されることになっていたが、遺構の下部はそのまま現地に残されることになり、中に砂を詰めて遺構を保護する予定であった。しかし、玄室から前庭部への傾斜が急であったため、岩盤からの滲出水で砂が流出する恐れがあることから、内部に碎石を詰めることによって遺構下部を残した。



第3図 濑戸前1号横穴墓

第2節 遺構

瀬戸前1号横穴墓は、おおよそ西北西～東南東方向に主軸を持ち、西側に開口している（第3図）。発見時は既に掘削されていたため以前の地形は地図上ではしか判らないが、北へのびた丘陵先端に、規模から見て1基のみ築造された横穴墓と考えられる。天井部などいくらか崩壊箇所はあったものの、幸い全長は計測できた。平面主軸部分での長さは、墓道先端から玄室奥壁までが11.70m、羨門部から玄室奥壁までが8.05mを測り、この付近の既知の横穴墓の中では特に羨道が長いことが特徴である。

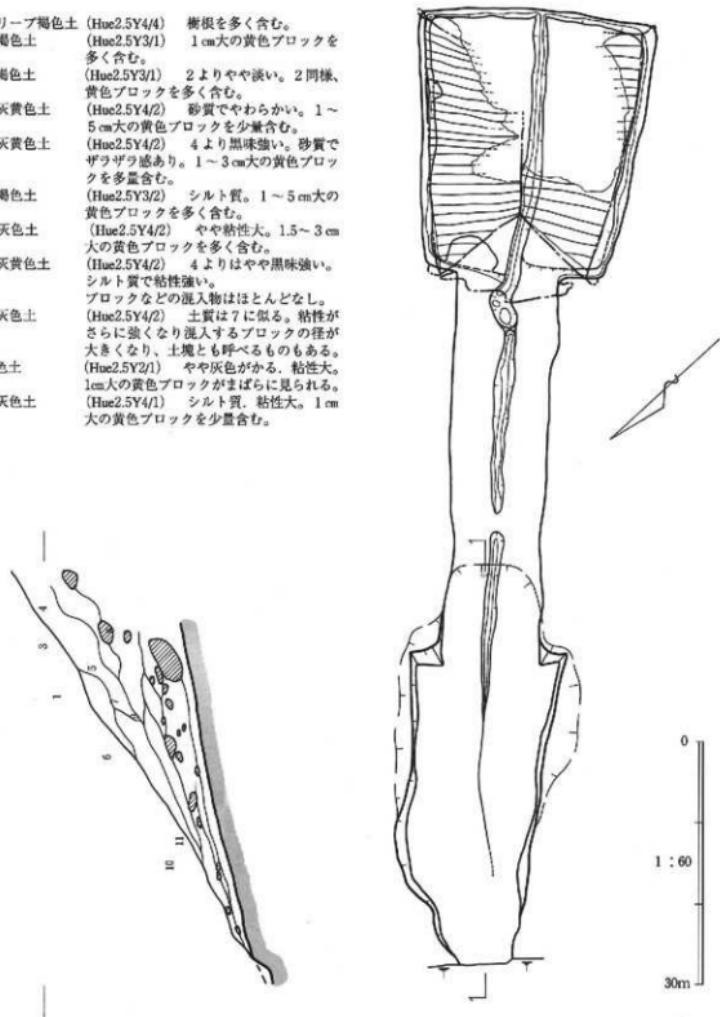
玄室は、床平面で長軸3.30m、奥壁幅2.88m、玄門側幅2.10m、床から軒先線までの高さ平均0.82m、現存する天井部の棟までが高さ1.72mを測る。玄門の両側には40～50cmの袖部分がある。天井部は、残存部から見て妻入寄棟造りの家型構造で、軒先部分が3～4cm抉られて作り出されている。また、天井部には手斧状の工具と思われるもので屋根が表出されており、縱方向に稜線で仕切られた凹面が見られるが、この凹面の中も丁寧に細かく削り込んで稜線を作り出している。3面の壁面のうち奥壁はほぼ完全に剥落して、床に面した部分のみが少し残存している。左右両側壁は、所々に縦あるいは斜方向の工具痕が見られるが、天井部と異なりかなり成形は粗い。玄門側壁面には、天井に比べるとやや粗いが斜方向の工具痕（稜線）が見られる。玄室の横断面形はどちらかというとドーム状に近い。

玄室内は礫床があったのか川原石が散乱していたが、天井部の崩落により石が動いたにしては玄門から羨道付近にまで散らばっていた。また、奥壁に向かって右側壁際の礫の上に鉄刀があり、その手前の床上に土師器の高杯や須恵器の杯、刀子等が集中していたので、鉄刀付近に礫床が作られていた可能性がある。これらの遺物はかろうじて崩落土の直撃を免れ、泥土の付き方など人為的に動かされた様子も見られなかった。また、遺物のまわりや中にもきめの細かい泥土が流れ込んでおり、この泥は玄室床面も覆っていたので、大雨などの際にシルト岩からしみ出た水で細かい砂が長年の間に堆積したものと考えられる。この泥土に覆われて玄室床面中央と左右両側壁、奥壁の下に排水溝が掘り込まれていることが確認された。左右両側壁の下の排水溝は玄門のところで溝は消滅し自然に羨道床面へと続き、床の傾斜から見て中央の排水溝へと流れる構造と思われる。また、中央の排水溝は羨道の途中で一旦途切れ、再び閉塞石の下を通り前庭から墓道のあたりでは、床面中央が窪んだような構造に変わる。

羨道は長さが平面で4.73mを計り、横断面形は半円形を呈する。床面幅は玄門から羨門までほぼ一定で約1.20m。玄門の高さは1.10mを測る。壁面や天井部は大きく剥落しているが、残りの良いところで床面からの高さが1.20m程である。羨道壁面もやや粗いが縦方向の工具痕（稜線）が見られる。羨道床面の中央排水溝付近には、須恵器の杯身や脚付短頸壺などがやや浮いた状態で出土し、溝中より耳環が1個出土している。この羨道内部には川原石は殆どなく、玄門近くに少量散見できるほかは、羨門の閉塞部分に多量の川原石が積まれている。閉塞石の正面最下部には長さ1m近くもある巨大な川原石が据え置かれており、その後ろ1.50m程の範囲に大小の川原石が、傾斜の急な正面からなだらかにやや崩れ落ちたような状態で積まれている。この羨門部は上部がかなり崩壊していて旧状をうかがい知ることが困難である。

丘陵斜面に穿たれた前庭部は完全に埋まっていたが、埋土の堆積状況からは、丘陵上方からの土砂が流れ込んで堆積したような状態である（第4図）。埋土の堆積状況からの追葬の有無は不明である。前庭部は羨門部前で幅1.75m、墓道入り口で幅0.60m、中央での現存長は3.60

- オリーブ褐色土 (Hue2.5Y4/4) 植根を多く含む。
- 黒褐色土 (Hue2.5Y3/1) 1 cm 大の黄色ブロックを多く含む。
- 黒褐色土 (Hue2.5Y3/1) 2 よりやや淡い。2 同様、黄色ブロックを多く含む。
- 暗灰褐色土 (Hue2.5Y4/2) 砂質でやわらかい。1 ~ 5 cm 大の黄色ブロックを少量含む。
- 暗灰褐色土 (Hue2.5Y4/2) 4 より黒味強い。砂質でザラザラ感あり。1 ~ 3 cm 大の黄色ブロックを多量含む。
- 黒褐色土 (Hue2.5Y3/2) シルト質。1 ~ 5 cm 大の黄色ブロックを多く含む。
- 黄灰色土 (Hue2.5Y4/2) やや粘性大。1.5 ~ 3 cm 大の黄色ブロックを多く含む。
- 暗灰褐色土 (Hue2.5Y4/2) 4 よりはやや黒味強い。シルト質で粘性強い。
- 黄灰色土 (Hue2.5Y4/2) ブロックなどの混入物はほとんどなし。
- 黑色土 (Hue2.5Y2/1) 土質は 7 に似る。粘性がさらに強くなり浸入するブロックの径が大きくなり、土塊とも呼べるものもある。
- 黄灰色土 (Hue2.5Y4/1) やや灰色がかる。粘性大。1 cm 大の黄色ブロックがまばらに見られる。



第4図 濑戸前1号横穴墓床天井部の構造及び前庭部埋土土層

mである。床面には、閉塞石と思われる多くの川原石や少量の須恵器・土師器片が出土したほか、遺物は見られなかった。

第3節 出土遺物

数値、色調などの詳細については、遺物観察表に記載しているため、必要な事項以外はここでは触れない。主に器種、種別ごとの概要と特記事項についてのみ取り上げることとする。

1 玄室内・羨道出土遺物（第5・6図）

土師器（1～5）

杯（1）、高杯（2～5）が認められる。5は破片が小さく、そのいずれか判別できない。それらは全て口縁下部が屈曲し、外面に稜が形成される。稜以下は調整が粗く工具痕が明瞭に残る。1は須恵器の立ち上がり様の段が見られる。いわゆる須恵器模倣杯の一例であろう。須恵器（6～8）

台付短頸壺（6）、杯（7・8）が認められる。いずれもほぼ完全な状態で遺存している。6は頸部が屈曲し、外面に明瞭な稜が形成される。杯身の8は、回転ヘラケズリの施される範囲が底部付近に限られる。回転ケズリの痕跡から、ロクロは、時計回りに回転していたことが判る。

鉄刀（17）

全長57.2cmの平造り鉄刀である。茎胴部は先細となる。鉄製の鐔が刃部と茎部の境に銛付している。そのため関部は観察できないが、おそらく両関であろう。茎尻は直線をなす、いわゆる一文字尻である。茎胴部に目釘孔が2箇所認められるが、1箇所は軟X線でのみ、その痕跡が確認できる。

刀子（18・19）

いずれも両関の刀子で、刃部は湾曲している。19は柄部に木質が残っている。

鉄斧（20）

両肩の鉄斧。袋部の断面が正円に近いものである。刃部の断面は銳角を呈する。

鉄鎌（21～24）

いずれも欠損しており全容は不明となっている。21は鎌身頭部が柳葉状に近い三角形を呈する。鎌被は棘状に突起する。22は方頭のもので、鎌被部分に樹皮巻きが見られる。23と24はおそらくは細根系鎌の柄部で、鎌被は棘状に突起する。

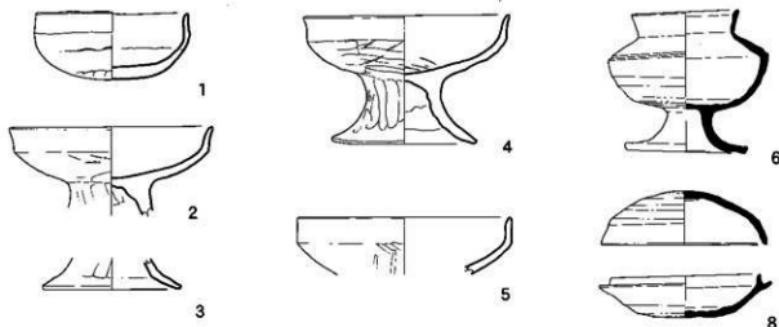
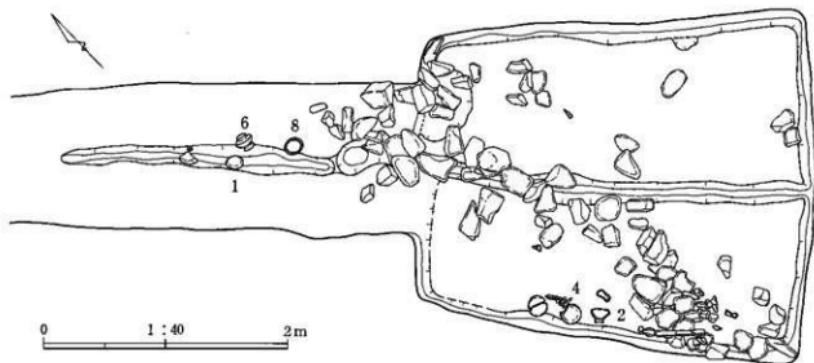
その他の鉄器・装身具（25・26）

25は銅芯の耳環。銀貼りと見られる。ところどころ剥落し、銅芯部は錆化が著しい。26は鉄製の帯金具である。

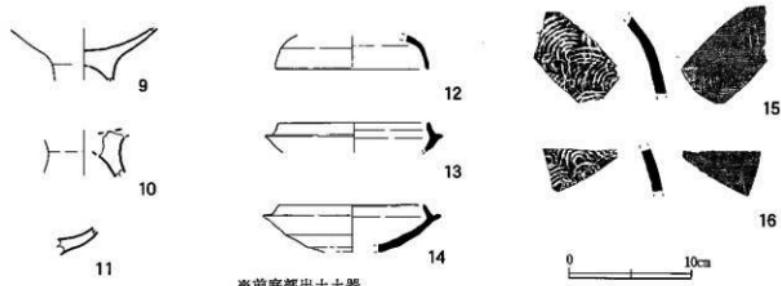
2 前底部出土遺物（第5図）

土師器高杯（9～11）、須恵器杯（12～14）、須恵器瓶あるいは壺（15・16）などが認められる。いずれも破碎されたためか、小さな破片となっている。

なお、須恵器杯蓋について見てみると、玄室出土資料の7の口径が13.6cmであるのに対し、12は12.5cmと若干小さくなる。羨道部より出土した6を含めて、微妙な時期差を示す可能性もある。

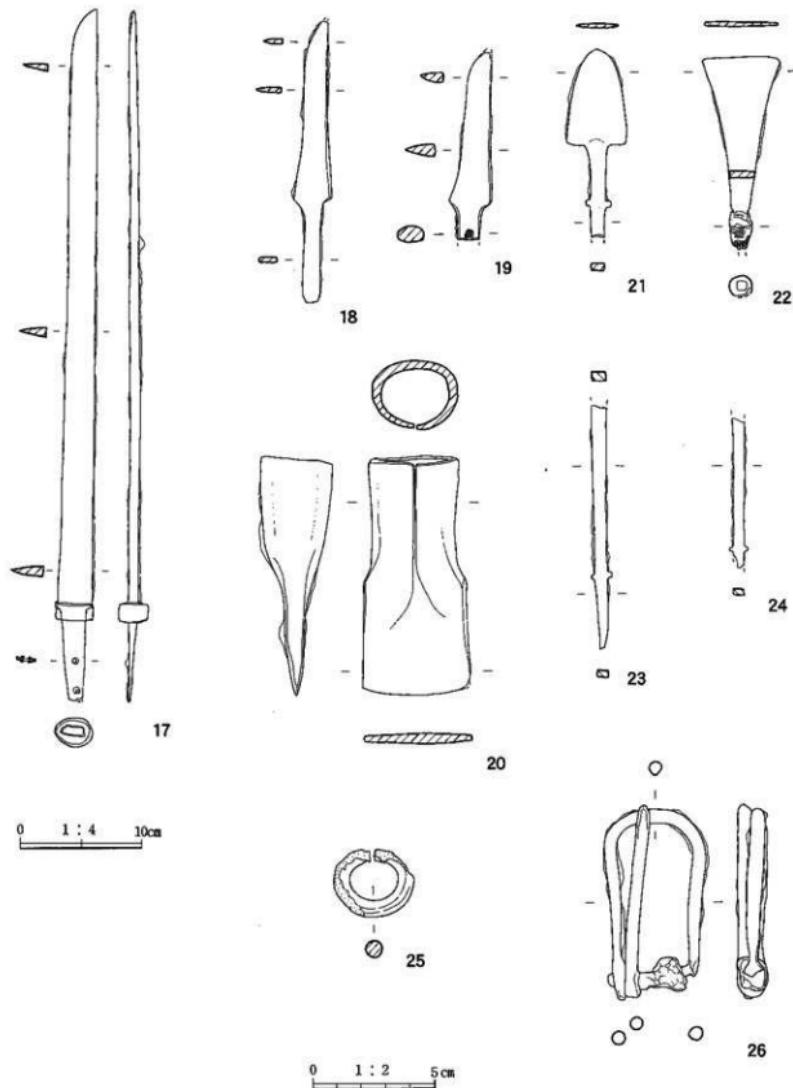


※玄室内出土土器



※前庭部出土土器

第5図 濑戸前1号横穴墓出土物及び出土位置



第6図 潟戸前1号横穴墓出土遺跡(2)

第4節 小 結

以上触れたように、本横穴墓は若干の崩落はみられたものの、前底部から玄室まで残存しており、構造や規模を窺い知ることができる。また遺物については現代の軍手やロウソクが見られたことから一部は散逸した可能性もあるが、土器はほぼ原位置をとどめていると見られ、年代比定の重要な資料となろう。なお、その築造年代であるが、およそ7世紀初頭の築造と見ることができる。根据については第Ⅳ章で述べたい。

第1表 潤戸前1号横穴墓 遺物計測・観察表

No	遺物種別	器種	計測値(単位cm)	色調	胎土(混入物)	残存度	備考
1	土師器	杯	口径 12.2, 器高 5.6	橙	微細透明粒	1/1	須恵器模倣杯
2	土師器	高杯	口径 16.4	橙, にぶい黄橙	黒色柱状粒	1/3	
3	土師器	高杯	底径 11.1	にぶい黄橙	微細透明粒	1/8	
4	土師器	高杯	口径(16.6), 底径 11.5, 器高 10.8	橙, にぶい黄橙	褐灰色 灰色粒多量	1/2	
5	土師器	高杯?	口径(17.3)	灰黄	5mm大の茶色粒	1/5	
6	須恵器	台付短頸壺	口径 8.6, 底径 9.6	灰	精良	1/1	体下部回転ケズリ
7	須恵器	杯蓋	口径 13.6, 器高 4.5	灰, オリーブ灰	微細な灰白色粒	1/1	
8	須恵器	杯身	口径 12.2, 器高 3.7	灰白, 灰	灰白色粒	1/1	
9	土師器	高杯		橙	赤褐色粒		
10	土師器	高杯		橙	赤褐色粒	1/2	9と同一個体か
11	土師器	高杯?		にぶい黄褐	微細茶色粒		
12	須恵器	杯蓋	口径(12.4)	灰	精良	1/9	
13	須恵器	杯身	口径(12.3)	灰	精良	1/8	
14	須恵器	杯身	口径(11.8)	青灰	精良	1/4	
15	須恵器	瓶か壺		灰, 暗青灰	黄白色粒		
16	須恵器	瓶か壺		灰, 暗青灰	黄白色粒		

No	遺物種別	器種	計測値(単位cm)	備考
17	鉄器	刀	全長 57.0, 刃幅 2.9, 刃厚(背) 0.9	目釘孔 2箇所
18	鉄器	刀子	全長 11.7, 身部長 7.4, 柄部長 4.3, 刃幅 1.5	
19	鉄器	刀子	身部長 6.4, 刃幅 1.6	木質残存
20	鉄器	斧	全長 9.9, 刃幅 4.4, 袋部径 3.5×2.9	
21	鉄器	鎌(三角)	鎌身部長 3.9, 頭部長 2.3, 鎌身部幅 2.4, 鎌身厚 0.3	棘状の鎌被
22	鉄器	鎌(方頭)	鎌身部長 6.3, 鎌身部幅 3.2, 鎌身厚 0.2	樹皮巻・木質残存
23	鉄器	鎌	茎部幅 0.5	棘状の鎌被
24	鉄器	鎌	茎部幅 0.6	棘状の鎌被
25	装身具	銅芯耳環	径 3.3, 厚 0.7	銀貼りか
26	鉄製品	帶金具	全長 8.0	橙

第三章 瓜生野村古墳30号（横穴墓）の調査

第1節 調査の経過

瓜生野村古墳30号（横穴墓）は、調査以前の早い段階で羨道から玄門部付近までの天井が崩落し、玄門部が長い間開口状態にあったために玄室内におびただしい量の土砂が流入していた。また、遺構の周辺は竹林および雑木林であり、開口部周辺はもとより遺構内まで樹根や竹根の侵入が認められた。そこで、調査は周辺の樹木等を伐採し環境整備を行ったあと、遺構内に流入した土砂の除去作業から着手し、玄室のプランおよび副葬品等の残存遺物の確認を進めることにした。

平成13年4月17日、現地での調査に着手し、同月26日まで、のべ5日間をかけて周辺樹木の伐採、遺構への作業道の開削等の環境整備と遺構図化のための基準杭の設置等の準備作業を行う。

平成13年4月26日、午前中までに諸準備作業を完了し遺構内流入土の除去作業に移行。玄室内を4つのセクションに分割し遺構内流入土の除去作業を開始。流入土は開口部付近ではかなりの厚みで堆積していたが、奥壁付近では玄門部付近より天井が高くなるため空間が確保できることから、しゃがんだ姿勢で作業ができる状態であった。同日中に奥壁に向かって右側のセクションで床面に到達し、鉄刀の一部（茎）を確認した。翌日27日にも2本目の鉄刀の一部（切先・茎）と伏せられた状態の杯蓋3個体が出土した。このことから、開口していたために盜掘を受けて遺物が散逸しているのではないかという当初の危惧は払拭され、遺物が予想以上に良好な状態で残存している可能性が高くなった。また、その可能性を支持する事実として、床面近くの埋土にかなり大きな灰黄色や黄褐色の砂質土ブロックが多数見受けられたことがあげられる（第8図）。これは、基盤の宮崎層群に掘り込まれた遺構の天井部が崩落した際に堆積したものと考えられ、少しづつ崩落したというよりは何らかの要因により、ある時期に大きな崩落が生じ遺物等が埋没したという見方に及んだ。

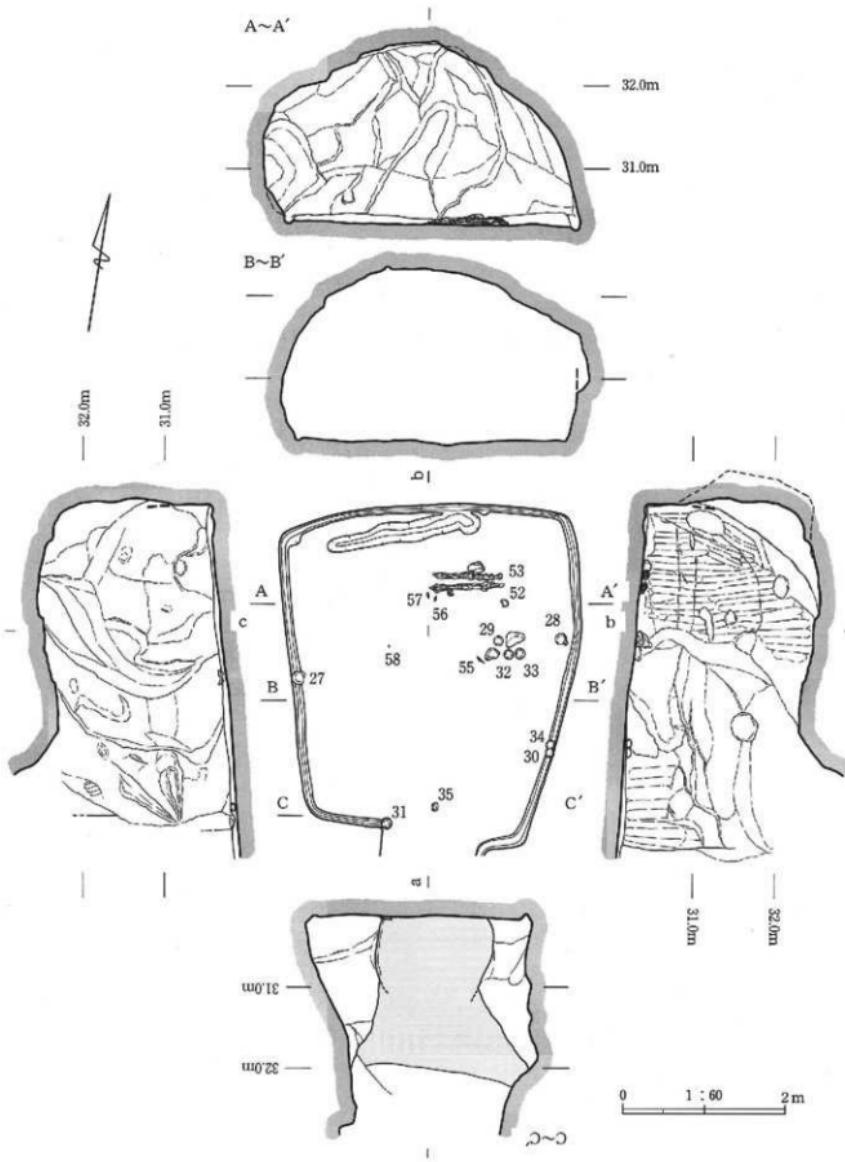
その後も作業は順調に進み、鉄刀・刀子等の金属製品や杯蓋・須恵器の杯・横瓶、土師器などの完形品が次々に床面から出土した。なかでも5月8日に玄門部に向かって右側のセクションの床面から出土した細身の銅芯金貼耳環は、金の被膜が一部剥離してはいたものの往事の輝きを今に止めていた。

平成13年5月15日に遺構完掘。埋土状況の図化作業完了後、土層断面観察ベルトをすべて除去し排水溝が周回する玄室の平面プランを確認するに至る。現地における作業は5月25日までに玄室平面の図化作業と最後まで残してあった鉄刀2本の取り上げを終え、委託した写真測量による玄室内的図化作業を残し、6月7日の空中写真撮影をもって終了した。

なお今回の調査は、道路建設工事に伴い遺構への影響が懸念される同横穴墓の玄室のみを対象とした緊急調査であった。したがって、崩落により埋没している前庭部から羨道部については工事による影響を受ける可能性がないため、調査対象から除外した。

第2節 遺構

前述の通り、今回の調査は玄室のみを対象としている。したがって本節は、この横穴墓の玄室プランおよび玄室内の遺物の出土状況等から得られた所見をもとにしたものである（第7図）。



第7図 瓜生野村古墳30号横穴墓

確認された玄室は、前述のとおり崩落が進んでおり、奥壁・左壁・天井部についてはほとんどその構造上の特徴を見出すことができない状態であった。しかしながら、右壁については風化が進んでいたものの床面から天井へと延びる壁面調整時の工具痕が認められた。その調整の様子からして本来は精緻な壁面をもつ玄室であったことが想像できる。

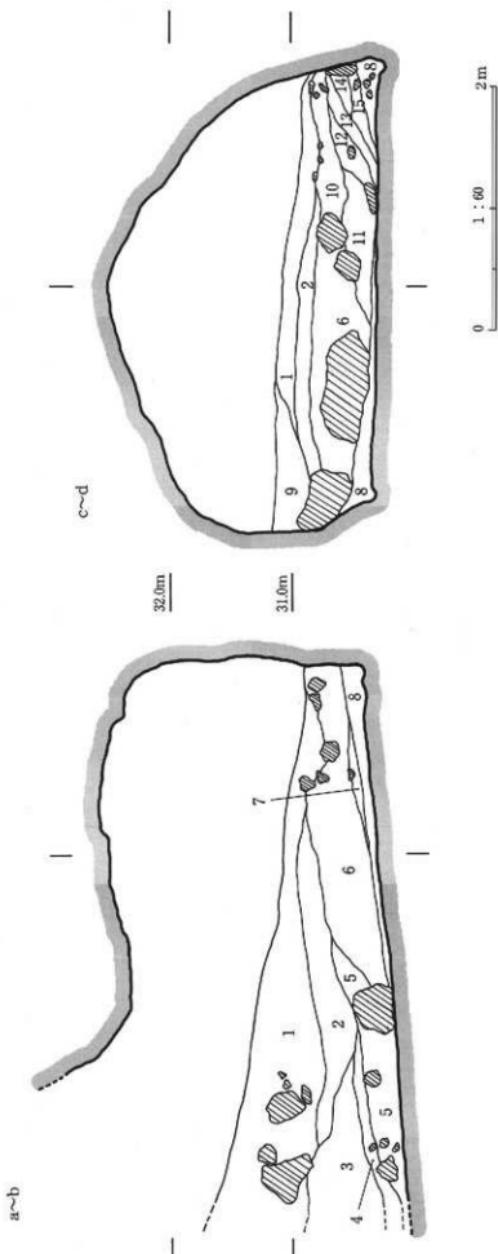
平面プランは台形状を呈するが、玄門部の左右の袖がややずれた位置関係を保っていることや右壁側が中央部付近で外側にやや張り出しているため、形状としてはややいびつな感じを受ける。また、玄室中央付近では右壁の工具痕から推察して床面から天井部まで2mを超える高さがあり、直立して作業をするのに十分な空間を有していたものと考えられる。規模は、玄室床平面で長軸3.90m、奥壁側幅3.60m、玄門側幅2.75mを測る。床面は奥壁から玄門方向に向かって約10傾斜をもち、若干の凹凸も認められるがほぼ平坦に成形される。

玄室の主軸に沿った溝は検出できなかったが、壁裾では玄室内を玄門部まで周回する幅がほぼ均一な溝が確認された。溝は左壁側では玄門部でやや不明瞭になるが、右壁側では羨道部に向かって延びていることが明瞭に確認できることから、羨道の両壁裾にそって溝が延長しているものと考えられる。この溝については、調査中に遺構が掘り込まれた宮崎層群中の砂層と泥岩層の層界から雨水が浸み出した際、水はこの溝に沿って玄門部に達し床面を浸すことになった。このことからもこの溝が排水の機能を十分に果たしていたことが立証された。また、奥壁中央からやや右壁よりのところから不成形な浅い溝状の遺構が検出されたがこれは人為的なものではなく、玄室内に侵入していた竹根などによる所作ではないかと考えられる。

天井部は前述したとおり調査着手時点ですでに崩落しており、現状ではその形状を確認することができなかった。しかし、奥壁隅角にわずかに残っていた立ち上がりや隣接した瀬戸前1号横穴墓のプランなどを合わせると天井部は寄せ棟風に作出され、妻側に羨道が取り付いていたものと推察できる。ただ、瀬戸前1号横穴墓で見られた側壁と天井部の境界を明瞭に示す立ち上がりの変化点は認められなかった。

玄室の副葬品と考えられる遺物は土師器椀、須恵器杯、平瓶、・銅芯金貼耳環、鉄刀、刀子、鍔、刀または刀子の装具などである。これらの遺物は大半が床に接するかもしくはわずかに浮いている程度の状態で出土した。また、遺物の中には原位置を離れ、壁裾の溝に落ち込んだ状態で出土したもの（土師器椀27、須恵器杯蓋30、杯身34）や、竹根により持ち上げられた状態で出土したもの（平瓶28）もあった。これらの出土遺物の中で特に目を引くものは、ほぼ平行な位置関係を保って出土した2振の鉄刀、伏せた状態で出土した3個体の須恵器杯蓋である。鉄刀については腐食し鏽が生じているがほぼ完全な形で出土し、51には鍔が貫通したままになっていた。また、刀53の近くから出土した鍔54は本来53に装着されていたものと考えられる。3個体の杯蓋は、ほぼ原位置を保っていたと考えられ、耳環の出土位置等から想定すると、被葬者の足下付近に何らかの意図をもって据えられたものであろう。

そのほか、流入土除去作業中に須恵器の小破片が出土しており、崩落し埋没している羨道部にそれらの原位置を求めることができる。



- 17 -

- 1 にぶい黄褐色土 (Hue10YR5/4) 砂質土。ガラス成分をわずかに含む。
(Hue10YR3/3) 水滴が見られる。5～20mm
(Hue10YR5/3) 大の砂質ブロックを含む。
- 2 黄褐色土。
(Hue10YR4/4) 黑色土。(植物腐敗土) との
混生が見られる。
- 3 黄褐色土。
(Hue10YR3/4) 3と類似するが、泥炭の割合が少ない。
- 4 黄褐色土。
(Hue10YR5/3) 黑色土の混在が少なく、砂質の割合が高い。
- 5 にぶい黄褐色土 (Hue10YR4/3) 黑色土の混在が少なく、砂質の割合が高い。
- 6 褐褐色土
かに含む。
(Hue10YR5/4) 純粹な褐土。鉄分により部分的に赤褐色土へ変化。
- 7 にぶい黄褐色土。
(Hue10YR5/4) 純粹な褐土。鉄分により部分的に赤褐色土へ変化。
- 8 黒褐色土。
(Hue10YR3/2) 泥炭の腐食により部分的に
黑色を呈する。
- 9 にぶい黄褐色土。
(Hue10YR5/3) 1と類似。やや暗めの色を呈し、不純物を含む。
- 10 にぶい黄褐色土 (Hue10YR5/4) 1と類似。やや暗めの色を呈す。
- 11 にぶい黄褐色土 (Hue10YR5/4) 2に類似するが、やや暗い
色を呈する。
(Hue10YR5/4) 11と
砂質ブロックを含む。
- 12 にぶい黄褐色土。
(Hue10YR5/4) 12よりやや暗めの色を呈す。
(Hue10YR5/4) 12より
砂質ブロックを含む。
- 13 にぶい黄褐色土。
(Hue10YR5/4) 13よりやや暗めの色を呈す。
(Hue10YR5/4) 13より
不純物を含む。
- 14 にぶい黄褐色土 (Hue10YR5/4) 14と類似。やや暗めの色を呈す。
- 15 黑褐色土。
(Hue10YR5/3) 6と類似。植物腐敗土によ
り混生する。

第8図 瓜生野村古墳30号横穴墓 玄室内流入土土層

第3節 出土遺物

玄室内の床面近くから出土した遺物と、玄室内流入土中より出土した遺物に分けて記述する。

1 玄室内出土遺物（第9・10図）

土師器（27）

27は外面に須恵器杯の立ち上がりを意識した屈曲部が見られ、稜が形成されるが、形状はむしろ椀と称した方が適當かも知れない。稜以下の調整は粗い。

須恵器（28～35）

28は平瓶である。ほぼ完全な形で遺存している。胴部にカキ目が明瞭に残る。

杯も、いずれも完全な形を保っている。35のみは飛鳥時代的な杯身（杯G形式）である。口径10.5cmを測る。他は古墳時代の系譜をひくもの（杯H形式）で、身の立ち上がりは短い。回転ヘラケズリの施される範囲は底部付近に限られる。29と30、34の外面上には、ヘラによる刻線が施されている。30のそれは×を描いているが、刻みが浅く、あまり明瞭でない。ロクロの回転方向については、時計回りのに回転してい痕跡を示す個体が多いように見受けられるが、必ずしも明瞭でないものもある。

鉄刀（52・53）

52は茎部が破断しているため正確な値は判らないが、全長90cmをこえる平造りの大振りな鉄刀である。鉄製の鐔が鋶着している。背が直線状となる片闇のもので、茎部の幅は身元幅よりもわずかに細くなる。茎胴部に目釘穴が1孔見られる。また刃部先端近くに木質の付着が認められる。

53は鉾と茎尻をわずかに欠く。片闇の平造り鉄刀で、曲線をなして切れ込む闇から、幅を細めることなく茎尻まで続く。茎胴部に目釘穴が1孔見られる。

54は倒卵形を呈する鉄製の鐔で、おそらく6個の透孔をあける。側面には細銀線による象嵌が施されていることが軟X線により確認された。

55は刀または刀子の装具（鞘か）と見られる断面楕円形の金属片である。

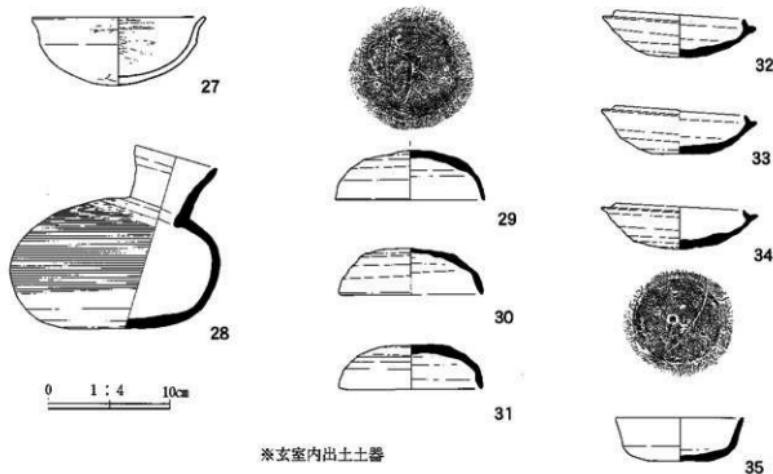
2 玄室内流入土中出土遺物（第9図）

須恵器の杯（36～42）、瓦泉、甕・瓶類（44～50）などが見られる。いずれも小さな破片である。48は外面にカキ目が残る。

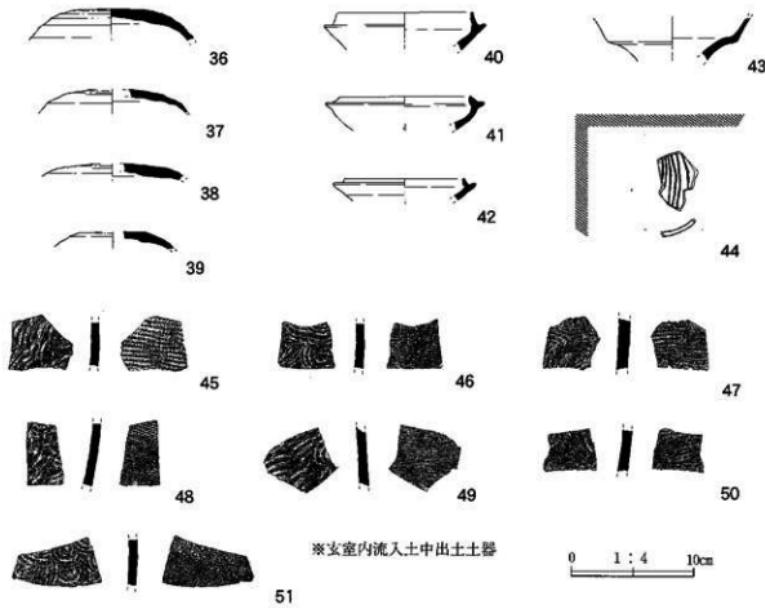
なお、51は器面の内・外とも黒色化させる瓦器椀の破片で、内面に同心円状ないしは渦状の暗文が施される。当然、横穴墓とは時期の異なる資料である。古代末に、付近で祭祀等何らかの人の営みがあったことを裏付ける資料である。

第4節 小結

瓜生野村古墳30号（横穴墓）は、玄室内に流入したおびただしい土砂の堆積状況から、かなり早い時点で天井部および側壁の崩落が生じることが調査の過程で確認できた。したがって玄室の正確なプランについては確認することができず不明確な点が多い。しかし、この崩落という事態は、ある意味では後世の盗掘などによる遺物の散逸を結果として防ぐものとなった。

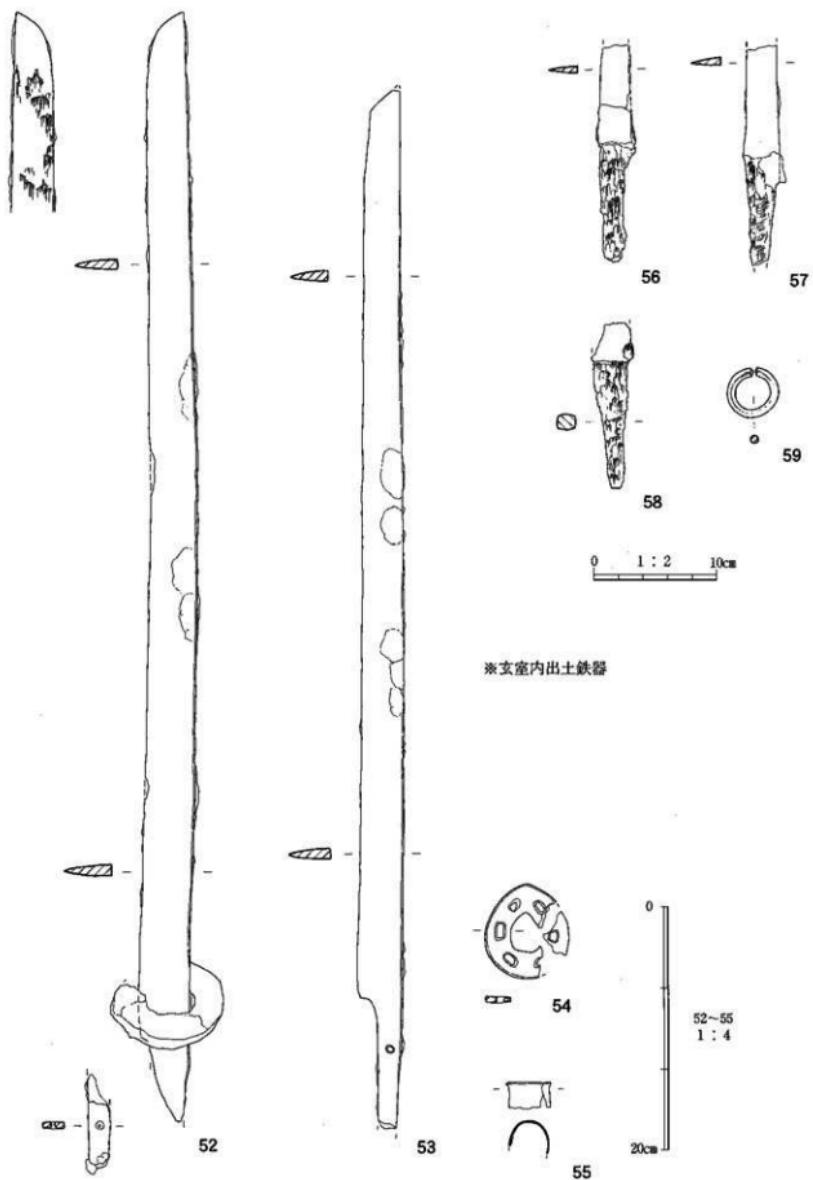


※玄室内出土土器



※玄室内流入土中出土土器

第9図 瓜生野村古墳30号横穴墓出土遺物(1)



※玄室内出土鉄器

第10図 瓜生野村古墳30号横穴墓出土遺物

この横穴墓の築造年代は、須恵器の年代観から7世紀前半頃と位置付けられよう。杯の径が小さくなるなど、より新しい様相を示している。また玄門の近くにあった35も同時期と目されるが、細かな時期差があった可能性は残る。あるいは追葬に伴うものかも知れない。

第2表 瓜生野村古墳30号(横穴墓) 遺物計測・観察表

No	遺物種別	器種	計測値(単位cm)	色調	胎土(混入物)	残存度	備考
27	土師器	椀	口径(14.3), 器高 5.6	橙, 銀い赤褐	赤・暗褐色粒	2/3	
28	須恵器	平瓶	口径 7.0, 器高 15.5	灰	精良	1/3	一部自然釉
29	須恵器	杯蓋	口径 12.3, 器高 4.1	灰白	灰白色粒	1/1	ヘラ描き刻線
30	須恵器	杯蓋	口径 11.9, 器高 3.9	灰白	灰白・赤褐色粒	1/1	ヘラ描き刻線
31	須恵器	杯蓋	口径 11.9, 器高 3.8	灰	白色粒	1/1	
32	須恵器	杯身	口径 9.7, 器高 3.9	灰	灰白・白色粒	1/1	
33	須恵器	杯身	口径 10.7, 器高 4.1	灰	灰白色粒	1/1	
34	須恵器	杯身	口径 10.5, 器高 3.9	灰白	灰・赤褐色粒	1/1	ヘラ描き刻線
35	須恵器	杯身	口径 10.5, 器高 3.7	灰	灰白色粒	1/1	
36	須恵器	杯蓋		青灰	白色粒		
37	須恵器	杯蓋		灰・青灰	白色粒		
38	須恵器	杯蓋		青灰	白・褐色粒		
39	須恵器	杯蓋		灰白・青灰	黄褐色粒		
40	須恵器	杯身	口径(11.2)	青灰	白色粒	1/8	
41	須恵器	杯身	口径(10.6)	灰白	白色粒	1/6	
42	須恵器	杯身	口径(9.8)	黄灰	白色粒	1/4	
43	須恵器	瓦皿		オリーブ灰・青灰	白色粒	1/6	
44	須恵器	甕か瓶		青灰	白色粒		
45	須恵器	甕か瓶		青灰・明青灰	白色粒		
46	須恵器	甕か瓶		灰・綠灰	褐色粒		
47	須恵器	甕か瓶		青灰	褐色粒		外面カキ目
48	須恵器	甕か瓶		青灰・暗青灰	白色粒		外面カキ目
49	須恵器	甕か瓶		青灰	褐色粒		
50	須恵器	甕か瓶		暗緑灰・明緑灰	褐色粒		自然釉
51	瓦器	椀		暗灰	精良		内面に暗文
No	遺物種別	器種	計測値(単位cm)			備考	
52	鉄器	刀	身部長 84.7, 刃幅 4.0, 刃厚(背) 1.0		木質付着, 目釘孔 1 孔		
53	鉄器	刀	身部長 74.9, 刃幅 3.4, 刃厚(背) 0.9		目釘孔 1 孔		
54	鉄製品	鋸	全長 7.9, 幅(5.8), 厚 0.6		透孔 6 孔		
55	金属製品	鞘金具	短径 3.3, 厚 0.15		木質付着		
56	鉄器	刀子	柄部長 4.9, 刃幅 1.4		木質残存		
57	鉄器	刀子	柄部長 4.4, 刃幅 1.5		木質残存, 地金に巻き付けの痕跡		
58	鉄器	刀子	柄部長 5.3, 刃幅 1.6		木質残存, 地金に巻き付けの痕跡		
59	装身具	銅芯耳環	径 2.1, 厚 0.3		金貼り		

第IV章 まとめ

ここに報告した2基の横穴墓は、一方のみ県指定史跡に指定されているという現代的な事情があるために名称がまったく異なるものになっているが、実態としては隣接し、関連する横穴墓である。この2基を含む群には、第I章でも触れた通り「上北方横穴墓群」という名称が与えられている。今回の瀬戸前地区の2基以外、これまでに調査された事例はないが、曾我部長良氏が精力的に探索して著した『日向の横穴』及び『同 続編』には、この付近の横穴墓についての分布図が示され（第1図下）、当該2基の周囲にもいくつかの横穴墓があったことがうかがえる。また同文献には、図との対比はできないが各横穴墓の計測値も記されている¹⁾。

さて、当該2基の築造年代についてはそれぞれの章の末尾で触れた通りであるが、ここでその根拠となる須恵器（特に杯）の特徴について見ておこう。なお、編年および実年代比定については、陶邑窯跡群の田辺昭三氏²⁾、隼上がり窯跡資料を用いた増田一裕氏の編年案³⁾に従う。

瀬戸前1号については、玄室内出土の須恵器杯の形状や口径（杯蓋13.6cm、杯身12.2cm）に着目した場合、TK209型式から隼上がりⅠ型式に比定できることから、おおよそ7世紀初頭の築造と考えられる。前部屋出土資料も基本的に同じ特徴を示すと考えられる。

瓜生野村古墳30号の須恵器杯の口径は、杯蓋が11.85～12.3cm、杯身が9.65～10.7cmであり、瀬戸前1号横穴墓のそれと比べて一回り小さい。それらは隼上がりⅡ型式に属し、7世紀前半の年代が与えられよう。なお、杯G形式に属する杯身の35は、口径10.5cmを測る。この個体についても、同一様式で捉えることはできようが、他からは離れた玄門近くで出土していることから、細かな時期差を示す資料である、すなわち追葬時のものである可能性も残る。

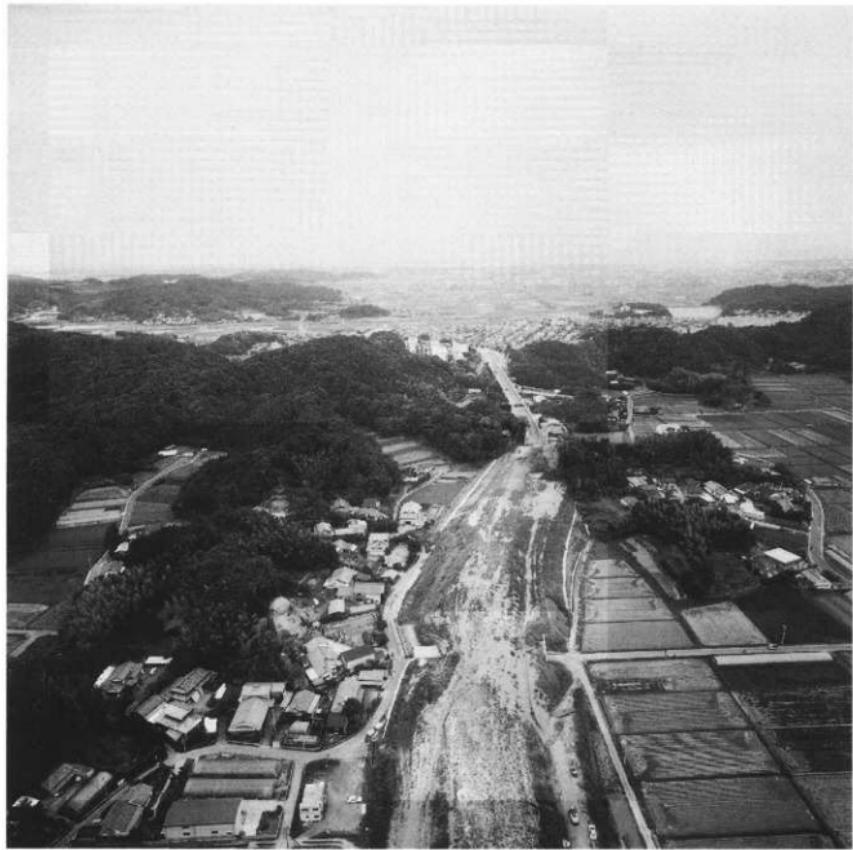
瀬戸前1号横穴墓は、宮崎平野部における横穴墓造墓の最盛期に築かれている。これは藤本貴仁氏のⅢ期に該当する⁴⁾。実際、その構造はⅢ期の典型例である蓮ヶ池横穴墓群53号に似る。

一方、瓜生野村古墳30号は、横穴墓が退行していく時期に築造されている。玄室の平面プランも横幅が長くなる。

なお、両者とも墳丘の存在については不明と言わざるを得ない⁵⁾。特に瀬戸前1号の近くは開削が進み、旧状が確認できない。ただし瓜生野村古墳30号については、測量図で見る限り、造墓主体が墳丘を意識していた可能性を全く否定することはできない。ただし、ここについても残念ながら、削平により確認が困難となっている。

註)

- 1 曾我部長良 1975 『日向の横穴』
　　〃 1986 『日向の横穴 続編』
- 2 田辺 昭三 1981 『須恵器大成』 角川書店
- 3 増田 一裕 1995 「飛鳥時代須恵器の編年にかかる追試作業」『土曜考古』19 土曜考古学研究会
- 4 藤本 貴仁 1998 「宮崎平野部の群集墳」『宮崎考古』16 宮崎考古学会
- 5 いわゆる「横穴墓」については、古墳の埋葬施設の一類型であるとの認識が現在では一般的で、類例の増えた墳丘を有する横穴は、決して特殊な様相を示すものではない。
佐原 真・田中 球編 2001 『日本考古学事典』（「横穴」の項）



瀬戸前 1号横穴墓・瓜生野村古墳30号（横穴墓）全景（上空北東より）

図版2



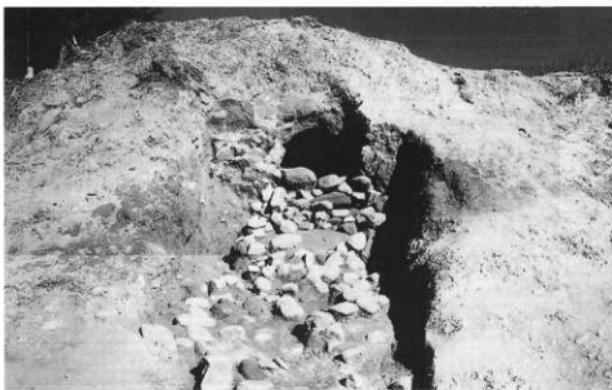
瀬戸前1号横穴墓（上空北東より）



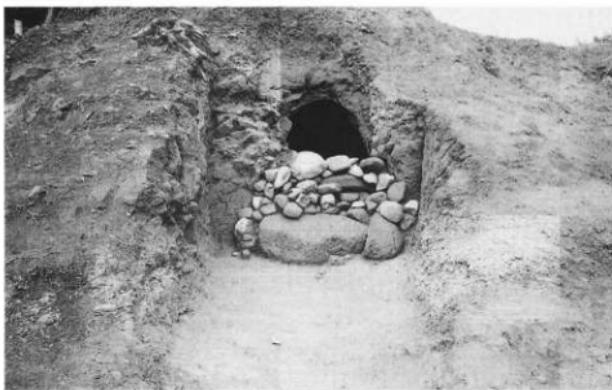
前庭部検出状況



前庭・羨門部
埋土半截状況



前庭・羨門部
転落礫の状況



羨門検出状況

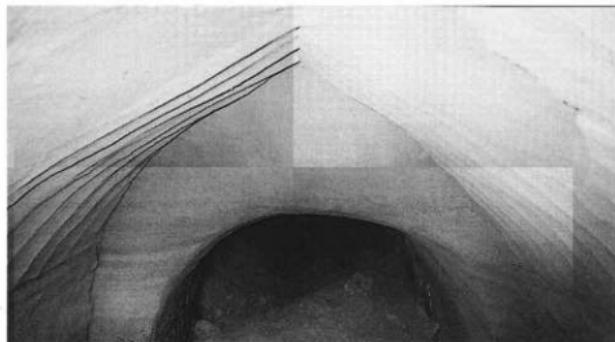
図版 4



羨道の様子

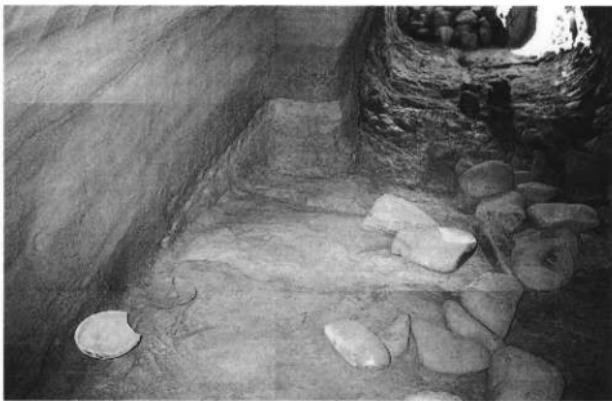


玄室側より
羨門部を見通す



玄室天井の構造

図版 5



玄室床面の状況(1)



玄室床面の状況(2)

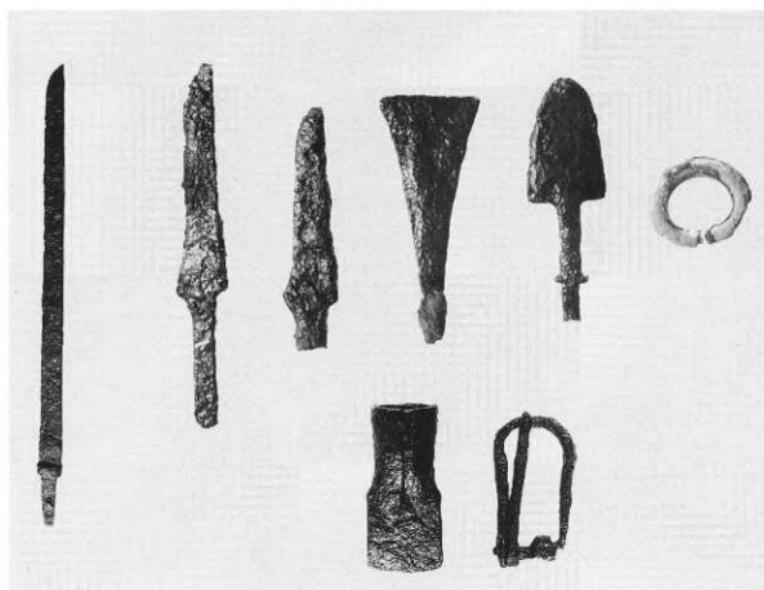


奥壁側を見通す

图版 6



出土土器



出土鐵器・鐵製品



瓜生野村古墳30号
(横穴墓) [南より]



玄室内流入土堆積状況



玄室内の状況

図版8



玄室内の遺物
出土状況(1)



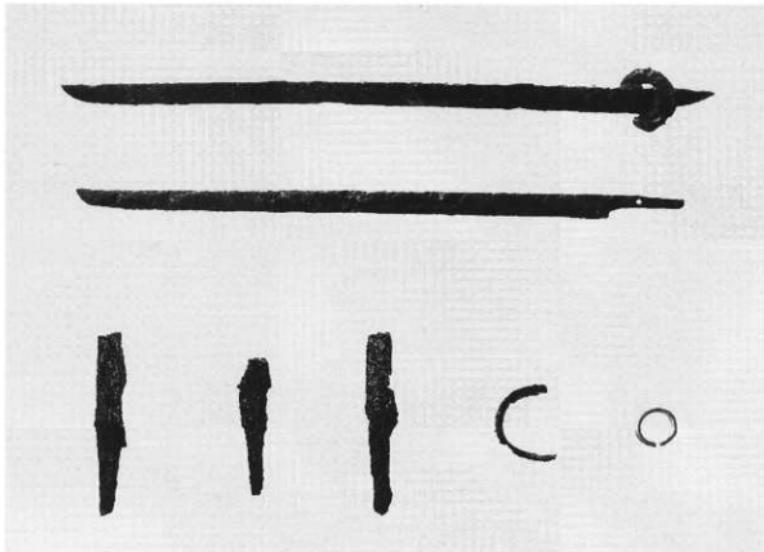
玄室内の遺物
出土状況(2)



玄室内の遺物
出土状況(3)



出土遗物(1)



出土遗物(2)

図版10



出土土器（刀の鐔）
X線写真による銀象嵌

報告書抄録

書名	瀬戸前1号横穴墓 瓜生野村古墳30号（横穴墓）							
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第72集							
編集担当者	吉本正典・菅付和樹・福田泰典	編集機関	宮崎県埋蔵文化財センター					
所在地	〒880-0212 宮崎県宮崎郡佐土原町大字下那珂4019番地							
発行年月日	2003年（平成15年）2月28日							
所在地	宮崎市大字字777-2, 776-15（北緯31° 57' 20" 東経131° 24' 30"）							
調査原因	道路改良	遺跡の種別	墳墓	時代	古墳時代終末期			
遺構・遺物	横穴墓、土師器・須恵器、鉄刀・刀子・鉄斧・鉄鎌、銅芯耳環、帶金具							
特記事項	瓜生野村古墳30号（横穴墓）出土の鉗（鉄刀のものか）に銀象嵌が施されている。							

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第72集
瀬戸前1号横穴墓
瓜生野村古墳30号(横穴墓)
平成15年(2003)2月28日

発行 宮崎県埋蔵文化財センター
〒880-0212 宮崎県宮崎郡佐土原町大字下那珂
4019番地
TEL 0985-36-1171 FAX 0985-72-0660
印刷 (株)印刷センタークロダ
〒880-0021 宮崎市大橋1丁目町175
TEL 0985-24-4351